



佐竹義昭奉加帳

昨年10月21日、常陸大宮市と秋田県大館市は、友好都市協定を締結しました。直線距離で400km 離れている両市が友好都市となったきっかけは、今からちょうど20年前の平成8年、当時大館市立城南小学校3年生だった吉田菜見さんが、当時の大宮町長に送った一通の手紙でした。

今回は、大館市と本市をつなぐ史料として重要な、「佐竹義昭奉加帳」についてお話ししましょう。

【甲神社と「佐竹義昭奉加帳」】

市内下町に鎮座する甲神社は、かつて部垂大宮大明神（みょうじんかぶとみや）甲宮と呼ばれ、周辺12ヶ村の総鎮守として崇敬されてきた古社です。甲神社には隣接して部垂城が築かれ、佐竹氏の領国支配の上で重要な役割を果たしていました。しかし部垂の乱と呼ばれる一族の内紛のため、天文9年（1540）、当時の佐竹16代当主義篤によって、城主であり実弟の部垂義元（たれよしもと）一族が滅ぼされ、落城しました。

義篤の子で17代当主となった義昭は、支配地の安定を図るため、積極的に領内各地の寺社を優遇し、弘治3年（1557）、部垂一族の鎮魂を願ってか、甲神社の大修理も実施しています。その折、修理費用の寄附を割り当てられた人々の名簿が「佐竹義昭奉加帳」（県指定文化財）であり、寄附者の多くは、「部垂衆」と呼ばれた、部垂氏の遺臣達と考えられています。



▲「佐竹義昭奉加帳」部分（県指定文化財 甲神社所蔵）

【吉田菜見さんからの手紙とその返事】

「私が住んでいる部垂町の名前は、大宮町とどんな関係があるのですか」

菜見さんから届いた手紙には、そう書かれていました。他の子ども達から「へったれまち」と悪口を言われる町名を不思議に思い、由来を知りたいと、図書館や郷土博物館で調べたところ、茨城県の大宮町と関係

があると教えてもらったのだそうです。

大宮町の市街地は、古くから「部垂村」という名前だったのに、江戸時代の終わり頃「大宮村」に変わったこと。460年ほど前の戦国時代は、このあたりを佐竹という殿様が治めていて、部垂城の殿様だった弟と戦争をして滅ぼしてしまったこと。殿様をなくした部垂の家来たちが、近くにある小場城の殿様の家来分になって、「部垂衆」と呼ばれたこと。多くの部垂衆の名前が書かれた「奉加帳」が甲神社に残っていること。佐竹の殿様が徳川家康の命令で、茨城を離れて秋田を治めることになったとき、小場城の殿様は一緒に秋田へ行き、大館にあったお城の殿様になったこと。小場の殿様の家来になった部垂衆も大館に移り住んで、住み着いた場所が「部垂町」と呼ばれることになったこと。これらを返事としてまとめ、菜見さんに送りました。

【奉加帳にある家臣の苗字】

佐竹氏が秋田へ移封された折、長男家族のみが秋田に従い、次・三男は農民として住みなれた常陸国に残った家臣も多かったといえます。

「佐竹義昭奉加帳」記載の内、判読できる苗字は、小田野、和田、根本、野上、長田、黒澤、石橋、江間、人見、田所、大山、大和田、徳川、片岡、大縄、後藤、長山、徳宿、関、安土、川上、荻津、高久、石川、小阿久津、立原、本橋、柏、瀬尾、高和田、小林、大串、内田、富岡、小槻、皆川、古徳、寺門、富山、阿久津、宮内、金田、小泉、山田、川又、飯村、山崎、篠田、綿引、梶、桑原、大賀、須藤、塙、倉田、宇留野、飛田、井坂、林、赤須、田村、小澤、掛札、大貫、清水、菊地、長井、大鷹、嶋根、沼田、藤田、木村、豊田、泉、河野、寺崎、安部、おそ能、栗田、岡崎、小室、伊坂、柏木、右澤、の84姓です。

ご自分に関係する苗字を見出された方も多いのではないのでしょうか？

【電話帳で調べた大館にある苗字】

菜見さんは4年生になっても調査を続け、大宮町と大館にある共通する苗字を電話帳で調べるなどしています。今回、菜見さんから送ってもらった大館の電話帳で、奉加帳にある苗字を調べたところ、なんと、半分以上の43の姓（赤字で示したもの）を見つけることができました。

もちろん、佐竹氏の秋田移封と全く関係ない家も多いに違いありません。しかし大館には、部垂衆のほか、小場の家来はもちろんのこと、秋田移封の3年前に取り潰しとなった長倉氏の家臣達も移り住み、長倉町として地名が残っています。奉加帳にない苗字でも、当市にゆかりある家が、まだまだ大館にはあるはず。本当の意味での友好都市として、400年の時空を超えた市民レベルの交流が期待されます。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450